

橋本治



Osamu Hashimoto

『浮上せよと
活字は言う』

橋本治

中央公論社

浮上せよと活字は言う

浮上せよと活字は言う

一九九四年三月二〇日 初版発行
一九九四年四月一〇日 再版発行

著 者 橋本 治

発行者 嶋中行雄

印刷所 三晃印刷

製本所 小泉製本

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二一八・七
振替 東京二二三四

©1994 CHUOKORON-SHA, INC.

Printed in Japan

ISBN4-12-002303-6

目次

啓蒙を論ず

5

嚴肅を嘆ず

35

改めて啓蒙を論ず

51

愚蒙を排す

67

退廃を論ず

101

断絶を論ず

117

更に断絶を論ず

131

三度断絶を論ず

147

変貌を論ず

165

男達はどこへ行ったか？

183

出版を論ず

221

物語の行方

239

浮上せよと活字は言う

啓蒙を論ず

イギリスの映画監督ピーター・グリーンナウエイは、『枕草子』を映画にしたいのだそうだ。それで「会ってみないか」と人づてに言われた。私は『コックと泥棒、その妻と愛人』を見て、いたくこの監督が気には入っていたのだけれども、『枕草子』の何をどう映画にしたいんだらうか?」ということになると、さっぱり分からず、会いたいとも思えなかった。

そのピーター・グリーンナウエイの新作である『プロスペローの本』の試写があるから見ないかと言われたのが一九九一年の暮れで、私はこういう映画が好きだから飽きもせずに見ただけで、この『プロスペローの本』という映画がどういう映画かということになると、実のところよく分からなかった。その頃の私は『窯変源氏物語』にかかりきりで、それ以外

のことは視野にないようなものだったから仕方のないことなのだけれども。

その映画がビデオになって発売されたのが一年後の秋のことで、『黒変源氏物語』を書き終えた私は、改めてこれに没入することになる。「こんなすごい映画はない」と。

『プロスペローの本』は、シェイクスピア最後の戯曲である『テンペスト』の、ピーター・グリーナウェイ流の映画化である。『テンペスト』と『プロスペローの本』の関係は、『源氏物語』と『黒変源氏物語』の関係に近いのかもしれない。私は「光源氏の語る光源氏の生涯」を劇中劇の形で登場させ、その後に、改めて原作者である紫式部のモノログによる、「彼女自身の物語」と「源氏の物語」とを二重写しにさせるようにしたが、『プロスペローの本』は、多分それ以上のややこしさを持っている。

『プロスペローの本』は、まず「水の滴^{しずく}」のアップから始まる。次いで、「彼は私の書物好きを知り、蔵書の中から何冊か、自分の国より大切な本を持たせてくれた」という、シェイクスピアの『テンペスト』の一節を書き綴る手と、主役のプロスペローに扮したジョン・ギールグッドのそれを読み上げる声。そしていきなり「1」という番号の付けられた「水の本」なるものが登場する。『プロスペローの本』というタイトルとこうした構成からでも分

かるように、これは“本に関する映画”である。

ミラノ大公プロスペローは、ナポリ王と通じた弟によって国を追われ、娘のミランダとただ二人、孤島に隠れ住んで十二年になる。ある日その島の近海を、仇であるナポリ王と弟の一行を乗せた船が通りかかり、これを千載一遇の機会と思うプロスペローは、得意の魔術によって嵐テンペストを起こし、船を難破させる。映画『プロスペローの本』の中心となるものは、この魔術を使うかつてのミラノ大公と、その魔術を可能にさせる彼の蔵書Ⅱ魔法の本にあって、この映画の中には1から24までの番号を付された二十四冊の本が登場する。勿論、こんな“本”はシェイクスピア原作のどこにもない。監督ピーター・グリーンナウェイによって書き込まれた新たな行間と思えばよいだろう。追放されたミラノ大公プロスペローは、孤島に住み、島に住む妖精達を魔術で自在に動かすことが可能になっていた——そのところを、“本”なるものを登場させることによって描き出そうという趣向である。

プロスペローは、その扉を開けばそのまま頁に描かれた水の絵が躍り出るという“水の本”を取り出し、それを開き見ている。彼は裸になって、プールのように広い古代風の浴場の中にいる。その画像に重なるようにして、インク壺につけられるペンのアップ。そしてペンの動き。そのペンの書き記す文字が映し出されて、その文字は“水夫長”ボートマン——これこそが、

ウィリアム・シェイクスピアによる彼の最後の戯曲『テンペスト』の一番最初の科白である。『テンペスト』第一幕第一場は、嵐の海上の船。その甲板に稲妻が閃いて雷鳴が轟き、船長と水夫長が登場する。嵐を恐れる船長は、水夫長に呼びかける——「水夫長！」と。シェイクスピアの『テンペスト』はそうのように始まり、映画『プロスペローの本』は、しかしこのセリフがプロスペロー役のジョン・ギールグッドによって発せられる。

裸で浴場の水に浸ったジョン・ギールグッドのプロスペローは、手を差し伸ばし、まるで声の調子をみるように「水夫長」と嬉しそうに言う。何度も何度も。

シェイクスピア原作の書き出しには、勿論「水夫長！」は一度しかない。傍らの水夫長に「しっかりしないと難破だぞ」と注意を喚起する船長は、その一言だけですぐに退場してしまふのだから。しかし映画のジョン・ギールグッドは、嬉しそうに、怒ったように、問い掛けるようにと、何度も調子を変えて「水夫長」を繰り返す。それに重ねて、画面には「水夫長？」「水夫長」「水夫長！」とだけを書き続けて行くペンの動きとその文字が映る。これが何なのかといえば、『テンペスト』のプロスペローを当り役とするシェイクスピア役者ジョン・ギールグッドが、舞台の出の前に自身の声の調子を嬉しそうに確かめている“であろう。魔法を使うプロスペローは、その魔法によって嵐を起こす——と同時にそれは、魔法を使

って『テンペスト』というドラマを展開して行くということでもある。ここではプロスペローが、作中人物であると同時に、このドラマ全体を掌握する“作者”としても登場する、ということだ。

“水夫長”という最初のセリフは、こんなトーンかな？ いや、もう少し厳しく言った方がいいかな？”と、自身で確かめるようにして、このドラマの作者でもあるプロスペローは、彼自身のドラマを演じ始めて行く。

『テンペスト』は、シェイクスピアが死んで七年後の一六二三年に出版された彼の最初の全集——三十五篇の戯曲を集めた一冊本の冒頭に、“まえがき”に続けて収められている。当時の人にとって最も記憶に新しい“最後の作品”だからだろうと言われている。妖精達が跋扈する、“赦し”をテーマにした作品である。

孤島に追放されたプロスペローは魔法によって嵐を起こし、彼を陥れた“悪人達”を島におびき寄せ、彼等を赦し、“敵”であるナポリ王の息子と恋に陥った娘ミランダ共々、彼の領国であるミラノへ戻る。

『テンペスト』の初演は一六一一年の十一月一日の万聖節の晩、ジェイムズ一世の御前だという。万聖節の前夜はハロウィン。妖精達が跋扈する、ケルト起源の“収穫祭”——この時

期に、“祝典劇”でもあり“夢幻劇”でもある『テンペスト』はふさわしい。更には、あるいはそれが“ジェイムズ一世の御前”であることも。

エリザベス一世によって死を宣告されたスコットランド女王メアリ・ステュアートの息子として生まれ、エリザベス一世の死後ステュアート朝の祖として王位に就いたジェイムズ一世は、ペダンチックで、自ら『王権神授説』を書き記しながらも、醜貌と美少年寵愛趣味で知られ、当時は“最も賢明なる愚者”と呼ばれたそうだ。両親の顔を知らぬまま一歳で亡命、即位して名目ばかりは“スコットランド王”でありながら、ほとんどは幽閉生活を続けさせられたジェイムズ一世の性格は、孤島で空気の精エアリエルを唯一の供として暮らす魔法使いプロスペローの中に、あるいは反映されているのかもしれない。

『テンペスト』はいたってシンプルで、そしてそれ故に“難しい芝居”でもある。謀反によって国を追われた王が魔法使いになるのはともかく、それが復讐を仕掛け、成就したと見るやそれを忽ちにして赦してしまうという心理の展開が、我々にはいたって“難しい”。そうした“孤島の復讐劇”の中に、娘と敵の王子との結婚を許し、それを称える為の劇中劇を挿入した“祝典劇”の色彩も持つてしまうという“矛盾”も。

我々は、どうあつてもすべてを「リアルに」見たがつて、作中人物の心理が理解出来ない
と、それだけで「難解」と決めつけてしまうが、別にこのプロスペローが我々と同じ人間で
あらねばならない必要などまったくくない。

まずは、この「プロスペロー」という主人公の名前だ。「Prospero」が「prosperous(繁栄
している)」という形容詞と重なり合っていることは間違いない。孤島で妖精達を使って祝
典の魔法を見せるミラノ大公が「繁栄の^{プロスペロー}」という名をもつのは、決して逆説ではないだろ
う。この主人公は、恐らく「豊饒^{ほうじょう}の大公」なのだ。その彼が復讐劇を演じて見せる。そして
しかし、この復讐劇は、決して凄惨なものではない。「悪人達」は愚かで鈍感で、小市民の
ように真面目だ。プロスペローは、終始一貫、これをからかうようにして彼の「復讐劇」と
いう遊びを繰り広げる。「復讐が成就すると見るや赦す」のではなく、『テンペスト』のプロ
スペローは、初めから愚かでマヌケな人間達を赦すつもりで、壮大なトリックを仕掛けたよ
うだ。すべての登場人物は、一切を承知しすべてから達観して遠ざかり赦している偉大な仙
人のようなプロスペローに翻弄され、「人の世には様々なドラマがある」とでも言いたげな
余韻を残して、この「祝典劇」は幕を閉じる——私には、シェイクスピアの最後の戯曲『テ
ンペスト』はそのようなもので、プロスペローは、そのような寓話化された存在なのだとし

か思えない。これが「難しい」のだとしたら、プロスペローという、一切を超越した仙人のようなキャラクターを観客に納得させるように演じるのが難しいというだけだろう。

まことにこれは難しい。人は様々の葛藤を内に抱え、それでも素知らぬ顔をして生きている。現代人はますます素知らぬ顔をして、しかし「仙人」だの「妖精」だの「魔法使い」だのというロマンチックなものとはますます無縁になって、「復讐」などということの機会とも無縁になって生きている。機会がなければ、復讐心などというものの登場する余地はない。がしかし、だからと言って、人がそれで寛容になったとは到底思えない。人はただ単に、無感動になっただけだ。無感動なまま、何が怒りというものを呼び起こす葛藤を作り上げていくのかという思索からも遠く、ぼんやりと、己れの手慣れた快感にばかり従って生きている。快もなければ不快もない。内にばかりだけ鋭敏で、しかしそれを把握したところで外に対しては無力の極みであることも知って、ぼんやりと昨日の手順に従って今日を送るだけになっている。未来に対しても鈍感、過去に対しても鈍感。だから当然「赦し」などというダイナミックな転換からは無縁なままでいる。外に目をつむれば、そこが「孤島」であるということとは忘れられる。凄惨が我身を削ることからも鈍感でいられる。己れの行為を検討することからさえも免れていられるから、思いついたような「復讐」がどれほどの結果をもたらして

も、知らぬ顔でいられる。我々は、嵐の中でケラケラ笑い、無表情にそれを見送っているだけの、結末を持たぬプロスペローかもしれない。この場合の“prosperous（繁栄している）”は、勿論逆説的な意味ではあるが。

そして、そうした泡のような繁栄の中にいる我々の前に登場するのが、ピーター・グリーンウェイによって作り上げられた『プロスペローの本』のプロスペローなのだ。ピーター・グリーンウェイは、彼のプロスペローを「わがままな愛書狂の老人」として描き出す。

弟の陰謀によって家臣を虐殺され、自身は幼い娘と共に小舟に乗せられて海に流された。しかしこの『プロスペローの本』の中の主人公は、「そんな俗事には一切関心がない」とばかりに、幼い娘が放心している小舟の中で、パンをかじりながら好きな本を読んでいるだけだ。「彼は私の書物好きを知り、蔵書の中から何冊か、自分の国より大切な本を持たせてくれた」という、映画『プロスペローの本』の冒頭の一節は、ここにかかる。

ピーター・グリーンウェイの主人公・プロスペローは、ただ本の中にいる。魔術を可能にする「自分の国より大切な魔法の本」の中にいて、魔法を駆使し、そして同時に、そうした彼自身の孤島のドラマを、『テンペスト』とやがて題されることになる本として書き記しながら、そのドラマの主演として、『テンペスト』という本の中に――。

彼「プロスペローは、本来なら難破寸前の船上にいる船長のものである科白を、楽しそうに語り出す。と同時に、それを書き記す。映画『プロスペローの本』は、このプロスペローの生誕とウィリアム・シェイクスピアによる『テンペスト』の物語を同時に描き出すことによって、我々に「何か」を語りかける。そしてその「何か」とは、勿論「赦し」なのだ。

このところ、ピーター・グリーンナウェイは「本」というものに格別の関心を示しているようだ。『枕草子』を映画化したいという彼は、「本を書く少女」をテーマにした映画を作りたいのだという。私は、彼と個人的に会った訳でも話をした訳でもないから、ただ彼の作品からそれを感じるばかりだが、『プロスペローの本』の前作である『コックと泥棒、その妻と愛人』でも、「本」は大きな役割を示していた。グルメを自認する粗暴な泥棒と、人間らしい教養に満ち溢れたその妻。夫の暴力的な支配に喘ぐ^{あえ}その妻が惹かれた「愛人」は中年の古書店主で、嫉妬に狂った夫は、その古書店主の口に本を詰めて殺してしまふ。

「本に殺された古書店主」の映画の次に「愛書狂のわがままな老人」の映画を撮る監督にとって、「本」というものはマイナスのイメージを持つものなのだろうか？「活字に対抗する視覚娯楽のメディアである映画」という考え方をすれば、こうした見方は簡単に出来る。が、